

スポーツ随想録 平成十八年三月二十一日
WBC初代王座 たなか踏基

第一回WBC(World Baseball Classic)のアジアA組一次リーグが、平成十八年三月三日(金)東京ドームで開幕し、初戦韓国が台湾を2-0で破った。WBCは米国のMLBのトッププロ選手が始めて参加する国別対抗戦で、文字通り野球の世界一を賭けて争う初の大会であるという。大会開催前エピソード、日本の四番候補のニューヨークヤンキースの松井秀喜は、一ヶ月の態度保留の後に出場辞退を宣言。当初意欲を見せていたシカゴホワイトソックスの井口資仁も一転辞退したことが話題となった。日本のMLB選手では、マリナーズイチロウ外野手と、レンジャーズの大塚投手が参加意思表示を表明した。

東京ドーム一次リーグでの日本は、一、二戦の中国を18-2、台湾を14-3、何れもコールドで下し、韓国には惜しくも2-3と逆転負けを喫し、A組二位で二次リーグへの進出を果たした。アジア一位を目論んだが、韓国の実力は侮れないものと知った。参加国は十六ヶ国で、4チームずつ4組に分けて、先ず夫々の地域で一次リーグを行なう。各組の上位2チーム、更に合計8チームを2組に分けて、米国内でトーナメントの二次リーグで戦う。夫々の二次リーグの上位2チーム、合計4チームにより決勝トーナメントを行い、準決勝・決勝を争う。3位決定戦は行なわず、準決勝敗退の2チームが3位となる。

野球ファンの多くの人々は、WBCの運営委員会取決めの特別ルールに戸惑いながらTV観戦したのではあるまいか。投球数は、一次リーグが65球、二次リーグが80球、準決勝・決勝は95球に制限されるというものだった。大会の問題点も指摘されていた。審判が米国側で固められていたことである。

二次リーグの日本・米国戦の同点で迎えた八回表、

一死満塁から岩村の浅い左飛に、三塁走者の西岡の本塁へのタッチアップでボール返球も反れて本塁へ滑り込む。米国アピールも、二塁塁審によって却下されセーフと判定。ところが米国マルティネス監督抗議により離塁が早かったとして、デビットソン主審はアウトに判定を覆した。TV中継の番組内の解説者や参加国メディアが、主審の判定に疑問を呈する報道を行なった。VTRで検分しても、離塁が早すぎることはない。結果日本・米国は3-4とサヨナラ負けを喫した。対戦後、米国に善戦した王貞治日本代表監督とイチロー外野手が、冷静ながらも怒りを露にした記者会見「野球のスタートした国である米国で、こういうことがあつてはならないと、私は思う」質問書を退出した。「米抗議によって覆した訳ではなく、最初からアウト宣告の積りだった。判定は正当である」とのWBC本部回答にも疑問が残った。

誤審が、日本チームを一丸にしたかに見えた。この「アナハイムの悲劇」で米国に敗れ、もう絶対に負けられない状況下での日本・メキシコ戦は、救世主松坂投手の好投、小笠原先制2点打、里崎2ラン、イチロウの駄目押し適時打で6-1で完勝し、選手は韓国戦に必勝を誓ったのだが...

翌日の日本・韓国戦、0-0の均衡が八回に破れた。息詰る投手戦、再三のチャンス潰し日本優位に進む中、韓国は八回に四球とサードのタッチプレーでの落球エラーで、ランナーを生かす一、三塁。この好機に、二点タイムリーを打たれて日本は二点を先制された。韓国は、リリーフ投手をつぎ込み、5安打に抑えこまれ、敗戦時の悪いパターン、試合後半の致命的なエラーが命取りとなったのである。

日本野球の歴史では、三十年先行しており、韓国を上回っているという自負心は二度打ち砕かれた。一次リーグで韓国に破れ、二次リーグも一点差で敗れた日本、実力は上という人もいるが、いや精神力

でサーカール同様、対等以上の力を韓国に見せつけられた。九回裏日本の攻撃、西岡のレフトオーバーのホームランで一矢を報いたが日本・韓国戦、1-2で敗戦となった。勝利決定の瞬間、アナハイムの球場は、韓国大応援の歓声で沸き返った。イチロウは、咆哮し「我が野球人生で最大の屈辱の日」とコメント。米国を7-3で既に破り、二次リーグ三戦全勝の韓国が、決勝リーグTOPで進出を決定付けた。王監督は、韓国勝利は「執念の差」とコメントした。

翌日、野球の女神が微笑む奇跡が起こった。米国・メキシコ戦1-2、米国まさかの敗戦により、サンチーム一勝二敗で並び、失点率で勝る日本が辛くも二位となり準決勝進出が決まった。この戦いで、米国のデビットソン主審は、右翼ポールに当たる打球を二塁打と判定し、メキシコ側から猛烈な抗議。場内騒然となる誤審！本塁打に訂正されず試合が続行されたという。日本は準決勝で二度韓国と当たる。

打順組替えて望んだ準決勝 日本・韓国戦6-0、三度目の正直で雪辱。7回表、一塁打松中を代打福留の本塁打で帰し、里崎、代打宮本の連打、イチロウの適時打で一挙に5点、八回表多村の本塁打で駄目押、投げては上原が三安打無失点と力投、雨で45分中断後は藪田、大塚が反撃をかわして零封完勝。

決勝戦 日本・キューバ10-6で王ジャパンは第一回WBCの初代王座に就いた。五輪で苦杯を嘗め通算戦績4勝32敗のキューバ相手に勝利したことを大きい。初回4点、八回一点差に詰められたが、九回突放す。松坂が好投、継投と大塚でメタ。大会MVPに松坂が輝き、ベストナインに松坂、捕手里崎、外野手イチロウが選ばれた。日本チームを燃えさせ一丸にした外部要因は、一、メキシコの勝利二、韓国戦二敗 三、米主審誤審 参加16チームの頂点にたち駒上げの王監督の身体が、サンディエゴのペトコ・パークの夜空に三度舞った。了